



Title	Primary Open-Angle Glaucoma in a Population Associated with High Prevalence of Primary Angle-Closure Glaucoma : The Kumejima Study( Review_審査要旨 )
Author(s)	山本, 俊一
Citation	
Issue Date	2015-01-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/30314">http://hdl.handle.net/20.500.12000/30314</a>
Rights	

(別紙様式第 7 号)

## 論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	山本俊一
論文審査委員	審査日	平成 26 年 12 月 3 日	
	主査教授	青木 一雄	印
	副査教授	前田 士郎	印
	副査教授	石内 勝吾	印
( 論文題目 )			
Primary Open-Angle Glaucoma in a Population Associated with High Prevalence of Primary Angle-Closure Glaucoma : The Kumejima Study			
(論文審査結果の要旨)			
1, 研究の背景と目的			
<p>緑内障は日本における失明原因の第 1 位であり、大きく 2 つの病型に分類される。原発開放隅角緑内障はその主要な病型である。日本における大規模疫学調査として 2000 年に多治見スタディが実施され、全緑内障有病率 5.0%、その内訳として原発開放隅角緑内障 3.9%、原発閉塞隅角緑内障 0.6%、その他の緑内障 0.5%が報告された。多治見スタディ後、日本国内における再度の検討は、国際的にも非常に興味があるものと考えられていたこともあり、久米島スタディが大規模緑内障疫学調査の第 2 弾として沖縄県の有人離島である久米島町で 2005 年に実施された。本研究の目的は、沖縄県（南西諸島）における緑内障の病型別有病率とその発症や危険に関する因子を明らかにすることを報告した。</p>			
2, 研究内容			
<p>検診対象者は久米島在住で 40 歳以上の 4632 名、参加者は 3572 名(受診率 81.2%)</p>			

であった。多治見スタディと同一の診断基準(国際診断基準,ISGEO:1998)で全緑内障有病率は7.1%と国際的にも極めて高頻度であった。病型別有病率では原発開放隅角緑内障4.0%、原発閉塞隅角緑内障2.2%、その他の緑内障0.9%であった。統計解析の結果から、男性( $P=0.003$ )、加齢( $P<0.001$ )、高眼圧( $P<0.001$ )、長眼軸(近視性屈折)( $P<0.001$ )、薄い角膜厚( $P=0.006$ )が原発開放隅角緑内障の有意な発症危険因子であった。一方、高血圧( $P=0.322$ )、糖尿病( $P=0.939$ )、BMI 高値( $P=0.671$ )は危険因子とならなかった。以上の結果は多治見スタディと類似した。また多治見スタディと類似した結果としては原発開放隅角緑内障患者の内、正常眼圧緑内障患者(眼圧 $<22\text{mmHg}$ )の占める割合、多治見(90%) : 久米島(82%)と未受診率、多治見(93%) : 久米島(82%)などがあった。またこの正常眼圧緑内障患者の比率82%は最近行われた中国及び韓国の報告値と一致し、東アジア系民族の類似性が示された(但し、原発開放隅角緑内障の有病率は日本>韓国>中国と明らかに日本人は高有病率)。

### 3. 研究結果の意義と学術水準

本研究は沖縄県(南西諸島)と日本本土(多治見)で原発開放隅角緑内障の有病率、発症の危険因子が類似していることを疫学研究で明らかにした初めての報告である。原発開放隅角緑内障は日本全国、特に、本土においてはほぼ唯一の主要な病型(原発緑内障の90%を占める)である。一方、沖縄県(南西諸島)では原発開放隅角緑内障のみならず、より失明につながり易い原発閉塞隅角緑内障(4倍の失明リスク)の有病率も高く、この地域においては常にこの2つの病型に細心の注意を払い診療する必要があることを明らかにした点は臨床上極めて有意義であり、高い水準にあると考えられる。

以上により、本論文は学位授与に十分に値するものであると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
  - 2 要旨は800字~1200字以内にまとめること。
  - 3 \*印は記入しないこと。